



TITLE:

[紹介] 杜甫誕生千二百五十周年

AUTHOR(S):

笥, 文生

CITATION:

笥, 文生. [紹介] 杜甫誕生千二百五十周年. 中國文學報 1962, 17: 196-201

ISSUE DATE:

1962-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177129>

RIGHT:

紹介

杜甫誕生千二百五十周年

今年、一九六二年は、中國の最も偉大な詩人「杜甫」が生まれてから千二百五十年目にあたる。杜甫は、唐王朝の全盛期をきざぎざあげた玄宗皇帝即位のとし、先天元年、すなわち七一二年に、河南省鞏縣きやうの近くで生まれた。四川省文史研究館が編纂した「杜甫年譜」(一九五八年十二月 四川人民出版社)によれば、それは正月一日のことであつたという。そして代宗の大暦五年、すなわち七七〇年、妻や子を伴つての長い放浪の果てに五十九年の數奇な生涯を終えた。洪水のなかを湖南省耒陽れいから船で衡州こうへ下る途中のことであつたといわれる。

現在傳わる杜甫の詩はおよそ二千二百首。その詩は、彼の死の二年前に生まれた韓愈——中唐を代表する文學者——によつていちばやく評價されるが、やがて北宋に入ると、詩人としての名聲は、李白とともにはや不動のものとなる。一九四九年、中國が解放されてからも、過去の中國に

おける最も偉大な詩人としての評價は、いささかもゆらぎはしなかつた。というよりも、その評價は一層高まつたといつてよい。簡單には、新中國誕生後、續々と出版された「中國文學史」をひもといてみるがよい。李長之の「中國文學史略稿」第二卷(一九五四年六月 北京五十年代出版社)や林庚の「中國文學簡史」上卷(一九五四年九月 上海文藝聯合出版社)、また北京大學の「中國文學史」(上冊・一九五八年九月、修訂本第二冊・一九五九年九月 北京人民文學出版社)や復旦大學の「中國文學史」中冊(一九五九年四月 北京中華書局)、更には今年出版された中國科學院文學研究所の「中國文學史」第二冊(一九六二年七月 北京人民文學出版社)など。また杜甫に關する專著としては、革命後三年めに出了馮至ふうしの「杜甫傳」(一九五二年十一月 北京人民文學出版社・橋川時雄譯 一九五五年二月 筑摩書房)をかきわきりに、傅庚生の「杜甫詩論」(一九五四年十二月 上海文藝聯合出版社)、蕭滌非の「杜甫研究」(上卷・一九五六年六月、下卷・五十七年十月 濟南山東人民出版社)など。新聞や雜誌などに發表された論文に至つては枚舉にいとまがない。それらが強調する

ものは、安祿山の反亂によつてますます激化していつた社會の矛盾と混亂のなかで、杜甫が常に現實直視の目を忘れず、國を憂え、民を憂え、妻や子を憂える現實主義詩人であつたという點である。そしてそれは、律詩の完成者としての評價をおおいかくしてしまふほど重視されている。

世界平和評議會は、毎年物故した世界のすぐれた文化人の顯彰を提案しているが、昨年十二月にストックホルムで開かれた總會で、本年度の顯彰者として次の八人を取りあげることにした。

チャールズ・デイケンズ（一八二二—一八七〇）イギリス

の小説家 生誕百五十年

オー・ヘンリー（一八六二—一九一〇）アメリカの短篇小

説家 生誕百年

アレクサンドル・I・ゲルツェン（一八一二—一八七〇）

ロシアの思想家・小説家 生誕百五十年

ブレイズ・パスカル（一六二三—一六六二）フランスの思

想家 逝世三百年

紹介

ジャン・J・ルソー（一七二二—一七七八）フランスの思

想家・文學者 生誕二百五十年

杜甫（七二二—七七〇）中國の詩人 生誕千二百五十年

ヴィヴェカナンダ（一八六二—一九〇二）インドの思想家

生誕百年

ローベ・デ・ベীগ（一五六二—一六三五）スペインの詩

人・劇作家 生誕四百年

*この記事は、日本平和委員會の機關誌「平和日本」二月號に掲載された。なお「アカハタ」一月十二日號では、顯彰者を七人とし、ルソーとベীগがなくて、朝鮮の文學者・思想家丁茶山（一七六二—一八三六）が入っている。

中國ではこの世界平和評議會の決定にもとづく世界文化巨匠記念行事の一環として、民族の誇る詩人「杜甫」を紀念するさまざまな催しが、北京をはじめ全國各地でにぎやかにくりひろげられた。そのあらましは「人民中國」（日本語版）七月號に要領よくまとめられている。今この記事をもとに、わたしの見得た資料を参照しつつ、やや詳しく紹介する。

四月十七日夜、首都北京の政協禮堂では、中國人民保衛世界和平委員會・中國人民對外文化協會・中國文學藝術界聯合會・中國作家協會の共同主催で、各界の人士千四百人を集めて「杜甫誕生一千二百五十周年紀念大會」が盛大におこなわれた。主席團は、郭沫若・陳毅・茅盾・張奚若・楚圖南・巴金・朱光・臧克家・游國恩・阿英・何其芳・馮至らで構成された。まず郭沫若氏が開會の辭を述べたあと、北京大學の馮至教授が「偉大な詩人杜甫を紀念して」と題する講演を行ない、詩人の生平と創作を詳しく紹介しつつ、杜甫の詩が、思想性と藝術性が高度に結合したすばらしいものであることを強調した。その全文は四月十八日付の人民日報と光明日報に載せられている。會のあとでは、記録映畫「詩人杜甫」が上映され、また中國音樂家協會副主席查阜西氏の古箏による伴奏で、杜甫の「哀江頭」「官軍の河南河北を收むるを聞く」の二詩が朗誦された。このほか、唐代の宮廷生活を描いた戲曲「長生殿」のなかから「小宴驚變」が、昆曲の名優俞振飛と言慧珠によつて演ぜられた。

杜甫の故郷である河南省では、四月十三日、鄭州に文藝

界の人士が集まつて記念集會を開き、河南省文聯の機關誌「奔流」四月號には紀念の文章がのせられた（未見）。また四月十二日、四川省と成都の文化界でも、成都西郊にある杜甫草堂に、百人ばかりの集會がもたれて、杜詩の朗誦や、四川大學の繆鉞教授の「杜甫の生平と創作」と題する講演が行なわれた。さらに北京醫學會醫史學會は、四月八日、唐代の醫學者王冰による中國最古の醫書「素問」の注釋完成千二百周年と、「久しく病みて良醫と成り」、みずから藥草を採集、栽培して、豊富な醫藥衛生知識をもつていた杜甫の紀念集會を開いた。そこで醫師の耿鑒定氏による「杜甫詩文に見える醫藥疾病資料」と題する報告がなされ、最後に錢達根老醫師によつて杜甫の「采藥詩」が朗誦された。

新聞雜誌にも、杜甫に関する文章が陸續と發表されている。なかでも光明日報「文學遺產」は、四月十五日・二十二日・二十九日・五月十三日と連續して杜甫の特集號にあてており、雜誌では、「詩刊」が六二年第二期（三月）、「文藝報」が六二年第四期（四月）、「文學評論」が同じく第三・

四期（六・八月）、「文物」が第六期（六月）、「中國畫報」（七月）などで、杜甫に關する論文や紹介に多くのページを割いている。（杜甫に關する研究論文は、現在もなお發表されつつあり、その内容の詳細な紹介は、いずれなされる予定なので、ここでは省略する。なお今年の一月から六月までの論文題名と筆者名は、本號の卷末に付されている文獻目錄を参照されたい。）また文學作品としては、詩人晩年の湖南生活を題材にした馮至の歴史小説「白髮より黑絲を生ず」（人民文學四月號第一四九期）や、黃秋耘の「杜子美家に還る」（北京文藝四月號第九〇期）などがある。ところで杜甫研究家にとつて最も耳よりな話は、明の王嗣^し爽が一生をかけて完成した杜詩注解の集大成「杜臆」十卷の中華書局からの影印出版であろう。この書物はまだ一度も出版されたことがなく、寫本として傳えられていたに過ぎなかつた。従つてわれわれ日本人には、他の注釋書に斷片的に引かれているもの以外には全く見ることの出来なかつたものである。この書物の完全な原稿は、上海圖書館に所藏されており、さらにそれを寫したものが、北京・浙江の圖書館や、成都の杜甫草堂に藏され

ている。詳しくは光明日報四月二十日付の記事、及び劉開揚の「王嗣^し爽と彼の杜臆」（四月一日付光明日報文學遺產第四〇八期）や、柴德賡の「杜臆の作者王嗣^し爽について」（六月十七日付光明日報文學遺產第四一九期）を参照。ただしこの影印本は、現在のところまだ我國には輸入されていない。なお清の浦起龍の「讀杜心解」が昨年中華書局から刊行され、楊倫の「杜詩鏡銓」が同じく中華書局から杜甫誕生千二百五十年を紀念して出版されている。

記録映畫「詩人杜甫」は中央ニュース記録映畫制作所が今年の一月にクランクインして四月に完成したものの。映畫はまず詩人が生まれた頃の時代背景、玄宗の開元年間における唐王朝の繁榮ぶりを描いたあと、詩人が生まれた河南省鞏縣の南瑤灣村と、幼年時代をすごした洛陽を紹介し、ついで繪畫や塑像、遺跡などを通じて、長安・成都・夔^き州・岳陽などの生活を描いてゆき、さらに「兵車行」「三吏」「三別」などの詩が作られた社會背景と、安史の亂前後の歴史を概觀しつつ、詩人が現實主義のすばらしい藝術を作りあげたことを描いてゆく、といった筋のもの。なお映

畫には、文懷沙氏による杜詩の吟誦も吹きこまれている。
(四月十七日付人民日報・光明日報・大公報)

杜甫の遺跡も、各地で修理がおこなわれた。なかでも詩人が四年ばかり住んでいた四川省成都にある杜甫草堂は、解放以來六度目の大がかりな修復がおこなわれ、ながい戦争などで荒れはてていたものが、すっかり面目を一新した。詩史堂や陳列室・廻廊は、あらためて塗り直され、園内の道路や花徑・曲橋なども修理され、詩人がかつてそのそばで詩を吟じた池も、泥をさらえられ、草堂の管理處には、詩人が生前愛した桃や梅・松・竹などが移植された。そしてまた杜甫に關するあらゆる文物——詩集・注釋書・繪畫・拓本など——をここに搜集する努力がつづけられ、今や二千二百點以上の文物資料が集められて、草堂は杜甫の大紀念館となつてゐる。(人民中國六月號・林如稷「杜甫草堂にあそび」並びに四月十一日付人民日報・光明日報・大公報など參照) また詩人がかつて住んだところ陝西省の長安縣韋曲鎮にある杜甫祠も新たに修理された。ここには三つの陳列室があり、杜甫の泥塑像・長安行迹圖・杜甫石刻像拓本な

どがおかれている(四月十八日付光明日報)。なおまた新華社記者丁化の「杜甫故里見聞」(四月十七日付光明日報)によれば、杜甫の故郷、河南省の南瑤灣村には、杜甫が生まれたところと傳えられる山の横腹に掘られた洞穴があり、更に近くの寺溝村には、杜甫の三十八代めの子孫と稱する人が住んでいるそうである。寺溝村の半數を占める杜姓の家々には「詩是吾家事」の銘がはりつけてあつたが、最近「農業數第一」の句がつけくわえられた。

このほか、美術界では、杜甫の肖像畫や彫刻、杜詩に托した山水畫なども澤山つくられ、紀念切手も發賣されている。

最後に我國で行なわれた紀念行事について簡単にふれておく。我國でも世界平和評議會の顯彰に應じて、七月に「杜甫生誕一二五〇年日本記念會」が結成され、杜甫の業績を廣く國內に紹介普及し、その詩業を顯彰することになった。そしてまず「記念展」が東京日本橋白木屋五階畫廊で十月二十六日から三十一日まで開かれ、杜甫の畫像や、六十八種にのぼる杜甫のさまざまな版本が展示された。同

じ十月二十六日には、東京朝日新聞社講堂で「講演と音楽の夕べ」が開かれ、吉川幸次郎京大教授の「東洋の文學における杜甫の意義」及び齋藤勇東大名譽教授の「杜甫の人生觀」と題する講演と、土岐善麿譯詩、信時潔作曲の「兵車行」の獨唱（ピアノ木村潤二・獨唱友竹正則）が行なわれた。また十二月八日には、大阪のABCホールで、藝術院會員土岐善麿氏の「杜甫の詩と生活」と題する講演と「兵車行」の獨唱（ピアノ笠原進・テノール浦山弘三）が大阪府文藝懇話會によつて行なわれる。紀念論文集としては、中國文學報第十七冊のほかに、岩波書店「文學」十二月號が特集號を出している。この號に、上述の「講演と音楽の夕べ」における、吉川・齋藤兩氏の記念講演速記がのせられている。なお、單行本では、土岐善麿氏の「杜甫草堂記」（一九六二年八月 東京春秋社）が出版されている。

（京都大學 寛 文生）